続郷土研究入門講座

第一講　方言

永江秀雄

まず「方言」とは、普通には或る特定の地方に用いられていて標準語あるいは東京語と相違する言葉を指しますが、方言学上でいう方言とは「ある一地方の全言語体系」のことをいうので、標準語と異なつていようと一致していようと、その地方の言葉のすべてとその全組織を方言というわけです。従つて通俗的な意味の方言、すなわち或る地方に限り使われている特殊な単語のことは、厳密な意味の方言と区別して、多くの学者はこれを「俚言（りげん）」と呼んでいます。所で、本稿で私が述べる方言とは、我々の方言研究が少くとも究極的には若越全体の、又は一地方のすべての言語組織を対象とする（したい）ものである限り、正しく「方言」研究であるわけですが、実際的な方言研究とは、特に私どもの場合には、空漠たる全言語体系などというよりは、具体的な珍しい個々の言葉（即ち、俚言）に興味を覚えて、その研究に入ることが殆んどですし、また私はその方が望ましいと考えてもいますので、ここでは敢えて、その定義にこだわらず「方言」ということばを一般的な意味にも使用したいと思います。

さて、方言には種々の研究課題があり、あたかも大海の如く汲めども尽きせぬ興味と問題があるわけですが、それらは多くの場合、語彙（ごい）・文法・音韻の三つ（あるいは音韻の中からアクセントだけを取り出して四つに大別する場合もある）の面から、それぞれ研究されています。そして、それらの特徴が地理的にどのように分布しており、どのような方言区画が形成されているかを調べると共に、歴史的にどこまでさかのぼり、どのような変遷をたどつて来たかを探ることも重要な課題となつています。何らかの理由によつて自分が問題とし研究対象として採り上げた方言があるならば、必ずその語を歴史的なつながりと地理的な広がりの中において考えるべきです。私はこれを縦と横の関係と言つていますが、その十文字の交点にあるのが現に自分の直面している方言であることを常に念頭に置くべきこと、そして、その生きた方言を素直にありのまゝに観察することこそ、方言研究の第一歩であり、考えようによつては究極でもあると思います。

次に二三の具体例を挙げながら、若越方言研究のあり方を考えてみましよう。まず、語彙（わかり易く言えば、単語）について述べますと、何か珍しい言葉や不可解な方言があると、これを直ちに外来語に結びつけたり、見かけの上だけでの語源解釈をしたりすることがよくあります。例えば、越前（この例については、嶺北地方という方が良いが）で用いられるテキナイという語は、主に病気で苦しいことを言いますが、これを「敵がいない」から寝ることだと解説したり、若狭の西部で用いられ、恐ろしいを意味するキョウトイという言葉を「強敵」から来たものだと説く類です。こ

れらの場合、テキナイという方言の分布と使用状況を福井県内のみならず県外にまで詳しく調べて行くと、これは病気で寝ることではなくて、身体的に苦しいこと・だるいこと・疲れたことを表わすために用いられ、起源的には「大儀な」という語に始まることがわかります。なお、その用例は少くも近松の作品や一茶の日記などにまでさかのぼつて見出されるのです。一方、キョウトイという方言は、これも近松の浄瑠璃や室町時代の謡曲に用例があり、更にその起源的な用法として平安時代の蜻蛉日記や源氏物語の中に、何となくいとわしいという意味で「けうとし」という言葉が使用されているのを知るとき、「強敵」もたちまち退散ということになるわけです。

次に、若狭には「ようコサレ」とか「お前ならコサレ」という係結の法則の見本のような用語があり、帰ることを「去ぬる」といい死ぬことを「死ぬる」という古風なナ行変格活用の名残りが今も聞かれますし、越前には、既に標準語では認められない「出して」を「出イて」というサ行四段動詞連用形のイ音便形が常用されていますが、これなどもみな立派な文法面の研究課題です。また、音韻面では、古くは標準音であつた菓子クヮシ・会議クヮイギなどの合拗音クヮが老人の間には今も聞かれることがありますし、老若を問わず「先生」をシェンシェイという所があるかと思えば、逆に「喋る」をサベルと発音する地域のあることなど、詳しく調べれば幾多の興味ある問題が掘り出されて参ります。アクセントにしても一口に何とかなまりなどと言つて片づけたり、甚しくは「若狭のアクセントは朝鮮語に似ているから、若狭の人は朝鮮人と何かとの合いの子だ」などと粗雑きわまる主張をしたりなどしないで、やはり精密な調査研究をしてみることが必要です。

所で、私どもの方言研究の実際は、まず自分の身近の方言を素直によく見つめることに始まつて、更に今日までの方言学の成果をなるべく詳しく学びつゝ、自分みずからの調査と研究を進めて行くことが肝要だと思います。幸いにも最近の方言研究の進歩は著しいものがあり、その成果を一見するだけでも方言学が正しく素晴らしい科学であることを痛感させられます。我々はその結果を大いに利用して自らの研究を進めると共に、また、その成果から、方言が語彙文法音韻などの各分野にわたつて実に豊富多彩な研究課題を有するものであることを、その方法ともどもによく学習すべきであります。なお、いやしくも方言研究を志す者ならば、その当然の素養として国語学の全般、殊に国語の歴史的変遷について一通りの学習をすること、更に隣接科学の民俗学や歴史学などにも関心を寄せて、常になるべくその成果を学び取るだけのゆとりを持つことが望ましいと思います。既に解説の暇はありませんが、御参考までに末尾に、方言研究のために将来いずれはお読み願いたい図書名を掲げます。

最後に、私自身の方言研究は、言語に対する深い興味によるものであることは勿論ですが、それ以上に、わが国語と、その方言を用いる一人一人の〃人間〃そのものに対するやみ難い愛情に基づくものであることを申し添えて、稿を終ります。

（参考書）

方言学講座（全四巻）　東条　操監修
日本方言学　東条　操編
日本の方言　柴田　武著
全国方言辞典　東条　操編
標準語引分類方言辞典　東条　操編

日本語の歴史　土井忠生編
日本語の起源　大野　晋著
日本語の歴史（全七巻）　平凡社刊
蝸牛考　柳田国男著
以上